

ドロミテ・ラディン語バディーア方言における疑問の小辞

土肥 篤

Atsushi DOHI

0. はじめに

本稿では、イタリア北東部で話されるドロミテ・ラディン語 *Ladino dolomitico* の疑問文に見られる小辞について論ずる。¹ ドロミテ・ラディン語は主要なものだけでも五つの下位方言に分かれるが、この小辞は方言によって顕著に異なった振る舞いを見せる。当該現象に関する最新研究である Hack (2011) では、小辞の用法に関する方言間の差異について、語が発達していく過程を四段階に分け、各方言がそれぞれの段階に対応している、としている。

しかし、Hack による分析結果を実際の用例やテキストと照らし合わせてみると、原則としてはその有効性が認められるものの、さらなる議論が必要であると思われる点が見られる。本稿では、そのうち、バディーア方言 *Badiotto* において予想に反して小辞が出現しない疑問文が見られる文を二種類取りあげる。さらに、語の発達過程を四段階に分けるモデルについても、再考察を試みる。

1. ドロミテ・ラディン語について

ドロミテ・ラディン語に関して、とりわけ日本で扱われる場合においては、まず簡単な紹介が必要であろう。この名称を用いて呼ばれる言語群の定義は研究者の間でも意見の一致をみているとは言えないが、本稿ではガルデーナ方言 *Gardenese*、バディーア方言、ファッサ方言 *Fassano*、リヴィナツォ方言 *Livinallese*、アンペッツォ方言 *Ampezzano* の五つをドロミテ・ラディン語の主要な方言と見なし、「ドロミテ・ラディン語」と言ったときはこれらの方言の集合体を指すこととする。² これらは、北イタリアのトレンティーノ＝アルト・アディジェ州 *Trentino-Alto Adige* ボルツァーノ県 *Bolzano*、同州トレント県 *Trento*、ヴェネト州 *Veneto* ベッルーノ県 *Belluno* で話されている言語である。ドロミテ・ラディン語圏におけるこれらの方言の分布については、図 1 を参照されたい。

さらに、トレント県とボルツァーノ県にまたがって話されるノン方言 *Noneso* およびトレント県で話されるソーレ方言 *Solandro* はその系統論争がドロミテ・ラディン語にも関わってくる。ここでは系統に関する議論はしないが、これらの方言は疑問の小辞をめぐる議論においてもドロミテ・ラディン語に準じて扱われる。本稿ではこれらの方言について詳しくは扱わないが、先行研究に従って現象を概観するため、必要な場合にはドロミテ・ラディン語同様に他の北イタリア諸方言と区別して言及することにする。

2. 疑問の小辞

本稿で扱う「疑問の小辞」とは、次の例に見られるようなものである。³

(1) Cie ie *pa* chësc? (Anderlan-Obletter (1991), p. 8)

Che è PA questo?

「これは何？」 (ガルデーナ方言)

Meyer-Lübke(1972)によれば、このような小辞は、ロマンス諸語において疑問文の導入として頻出する要素である。これらは共通して、接続詞であった語が進化して疑問文に現れるようになったものであるが、その発達過程は言語ごとに異なる。

ドロミテ・ラディン語においては、(1)で見られるように、小辞は *pa* (方言によっては *po*) という形で現れる。⁴語源について、Kramer(1988-1998)によれば、少なくとも *po* という形についてはラテン語 *POST* である。⁵この小辞 *pa* については、Siller-Runggaldier(1993)、Poletto(2000)、Renzi & Vanelli(1982)等に言及が見られるが、現地で大規模に行われた調査を基にした Hack(2011)が小辞に焦点を絞った最新かつ最も詳細な研究であると言っていいだろう。

3. 用法

Hackによる研究では、小辞が疑問文に現れる場合とそれ以外の文に現れる場合に分け、それぞれについて用法を列挙し、このうち疑問文については、ドロミテ・ラディン語を含む北イタリア諸方言をその用法に従って四つのグループに分類している。⁶ここでは、この研究に従って、四つの用法および方言群を確認する。

グループ1：小辞の付加は任意的であり、それをつけた場合には文に新しい意味が付け加えられる方言

リヴィナッロンゴ方言、アンペッツォ方言、その他北イタリア諸方言がここに含まれる。

(2) ula podási *pa* l éapé (Hack p. 66)

Dove potrei PA lo trovare

「いったいどこでそれが見つかるのか」 (リヴィナッロンゴ方言)

(2)では、小辞 *pa* によって話し手の驚きのニュアンスが文に付け加えられている。本稿ではこのグループについて詳しくは扱わないが、与えられるニュアンスはこれに限らず、他に、話し手による非難・不賛成や、疑問文全体あるいは一部の強調等がある。

グループ 2：小辞が慣習的に用いられる方言

ファッサ方言、ノン方言、ソーレ方言が含まれる。

(3) Che as=te (*pa*) fat? (Hack p.67)

Che hai-tu PA fatto?

「何をしたの？」(ファッサ方言)

このグループの方言では、*pa* が意味を付け加えるような機能を持たないが、義務的に使用されるわけではない。(3)では、*pa* の有無に関わらず文法的な文となり、かつニュアンスの変化も起こらない。Hack はこの用法を指して「慣習化された」使い方 *uso convenzionalizzato* である、と表現している。⁷

グループ 3a：疑問詞疑問文において小辞が義務的に用いられる方言

バディーア方言のみがこれにあたる。

(4) Ula vas-te *(*pa*)?⁸ (Hack p.68)

Dove vai-tu PA?

「(君は)どこに行く？」(バディーア方言)

(5) Và-les (OK/**pa*) a Roma? (Hack p.68)

Vanno-loro PA a Roma?

「(彼らは)ローマに行くのか？」(バディーア方言)

この方言では、小辞は疑問詞を用いた疑問文(4)とそうでない疑問文(5)で異なる振る舞いを見せる。(4)では小辞が、通常の解釈をするためには義務的であるのに対し、⁹(5)ではそうでない。Hack によれば、(5)について、一部のインフォーマントは *pa* は許容できないとしたのに対し、許容できるが新たなニュアンスが付け加えられるとした者もいた。¹⁰いずれにせよ(5)に関して、小辞 *pa* のない文はどのインフォーマントにも問題なく受け入れられた。

グループ 3b : 疑問文一般において小辞が義務的に用いられる方言

ガルデーナ方言のみがこれにあたる。

(6) Ula va=les *(pa)? (Hack p. 68)

Dove vanno-loro PA?

「(彼らは) どこに行く?」 (ガルデーナ方言)

(7) Va=les *(pa) a Roma? (Hack p. 68)

Vanno-loro PA a Roma?

「(彼らは) ローマに行くのか?」 (ガルデーナ方言)

ガルデーナ方言では、疑問詞を使った疑問文(6)でもそうでない疑問文(7)でも、小辞 pa が義務的である。¹¹

Hack は、このように分類した上で、これら四種類の用法は、小辞 pa が文法化されていくプロセスをそれぞれ反映していると分析している。これによれば、最初は小辞が様々な意味を文に付け加えていた。この段階に留まっているのが、ドロミテ・ラディン語ではリヴィナツロンゴ方言とアンペッツォ方言が属するグループ 1 である。次の段階では、小辞がその意味を失って慣習的に疑問文に現れるようになる。グループ 2 がこの状態にある。さらに進化が進むと、疑問詞を用いた疑問文で小辞の使用が義務的になる。グループ 3a のバディーア方言がこの段階である。最後に、最も進化が進んだ状態がガルデーナ方言・グループ 3b で、疑問文一般において小辞 pa の使用が義務的となる。以上の仮説を、Hack は図 2 のようにまとめている。左側から右側に向かって小辞の発達の過程と、それぞれの段階にある方言群が示されている。

4. pa の現れないバディーア方言の疑問詞疑問文

Hack によって提示された小辞の進化モデルについて検証するため、今回の調査ではバディーア方言とガルデーナ方言を対象を絞り、テキストから疑問文を抜き出してその種類(疑問詞疑問文・それ以外) および小辞の有無によって分類した。¹²この方法で Hack の仮説を実際のテキストと照らし合わせてみると、ほとんどの点においてその有用性を確認することができる。しかし、さらなる調査・議論が必要であると思われる点がいくつかあった。そのうち、ここではバディーア方言に焦点をあて、疑問詞を用いた疑問文において小辞 pa が現れない文を二種類取りあげて検討する。またその際、ガルデーナ方言との比較も考慮に入れる。

まず、Hack (2011) では扱われていない、異なる小辞 mo が現れる文がみられる。

(8) Ći dijarál mo spo, che nos sun chilò? (Tolpeit(1992) p.31)

Che dirà-lui M0 allora, che noi siamo qui?

「じゃあ、私たちがここにいることを、(彼は)なんて言うかしら？」(バディーア方言)

(8)では疑問詞 Ći が使われた疑問詞疑問文であるにも関わらず、pa が現れず、代わりに mo という語が現れている。¹³Valentin(2004)によれば、この mo は「不確実な内容を表す」疑問文に現れる。バディーア方言にはラテン語 MODO を語源として前の文脈からの逆接を表す接続詞 mo があるが、疑問文に現れる mo はこの接続詞 mo と同時に現れることもある。

(9) Mo ési mo dūc sciōch'al toca? (AA.VV.(1984) p.862)

Ma sono-loro M0 tutti come egli tocca?¹⁴

「しかし、(彼らは)あるべきようにあるのだろうか？」(バディーア方言)

疑問文に現れる mo が接続詞 mo と同一の単語であるかについては現時点では不明だが、¹⁵疑問の小辞が一般に接続詞から発達したものであることを考えると、mo も pa と同様に接続詞から疑問の小辞として進化しつつあるのではないかと思われる。なお今回の調査の限りでは、ガルデーナ方言にはこのような、異なる小辞が pa の代わりに現れる現象は見られなかった。

第二に、疑問詞を強める副詞 mai が現れる文には pa が現れない。

(10) ěi mai t' él sozedù?¹⁶ (Zingerle(1985) p.68)

che mai ti è-egli successo?

「いったいあなたに何があったの？」(バディーア方言)

(10)は疑問詞 ěi が副詞 mai によって強められた文だが、小辞が現れていない。この種類の文は、ガルデーナ方言との比較において興味深い差異が見られる。

(11) Ulà sarà pa mēi Salvanel? (Wolff(1985) p.114)

Dove sarà PA mai Salvanel?

「サルヴァネルはいったいどこにいるのかしら？」(ガルデーナ方言)

(11)は(10)同様に疑問詞 Ula が、バディーア方言の副詞 mai にあたる副詞 mēi によって強められた文である。こちらは疑問の小辞 pa が出現している。

5. おわりに

前項では、先行研究で言及されていない、以下の二点について取りあげた。第一に、バディーア方言には、ガルデーナ方言にはない独自の疑問の小辞があり、pa と交替して現れていると思われる点。第二に、バディーア方言とガルデーナ方言では、副詞によって疑問詞が強められた文についても、小辞 pa の出現に差異が見られる点である。ここでは結論にかえて、これらの二点を踏まえて Hack による小辞 pa の文法化モデルを見直してみる。

Hack のモデルによれば、小辞はバディーア方言の状態を経てさらに進化した結果ガルデーナ方言のような使われ方をしている。しかし、pa と交替して現れる小辞 mo が、より前の段階であるバディーア方言でのみ発達しているという点を考えると、これら二つの方言における疑問の小辞の用法は進化の前後ではなく、ある時点で分岐してそれぞれに進化したものであるという可能性を疑える。

また、疑問詞が強められた疑問文における小辞の振る舞いの違いから、二つの方言における小辞の現れる条件は、疑問詞疑問文かそうでないかという単純なものではなく、より細かい規則を想定する必要があると思われる。

ただし、この調査は文献調査であり、確実であると言うには質・量ともに不十分であると言わなくてはならない。今後、現地でのより詳細な調査が必要であろう。

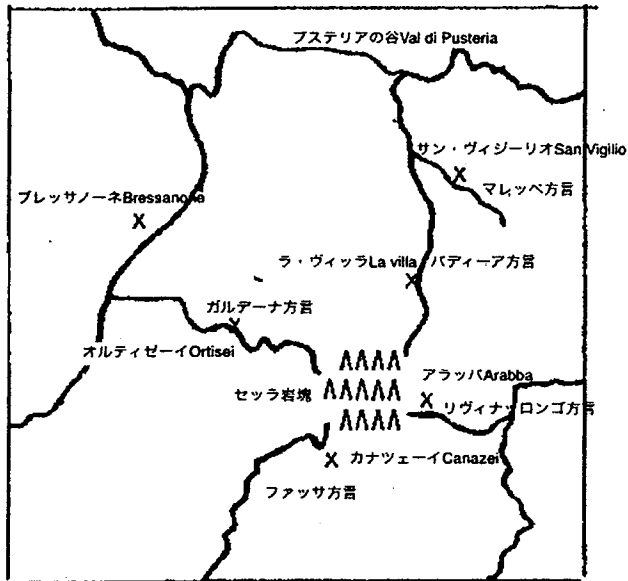


図 1：主要下位方言の分布

Kramer(1977-1978) p. 18 をもとに筆者が作成。¹⁷

語彙レベル	機能レベル			
段階	1	2	3a	3b
	未来			
時間を表す	接続	慣習化された用法	疑問詞疑問文における義務的な使用	疑問文一般における義務的な使用
	モーダル			
	強調			
	アルバーゴ方言Pagotto アンベツォ方言 リヴィナツロンゴ方言 等	ファッサ方言 ノン方言 ソーレ方言	バディーア方言 マレッベ方言	ガルデーナ方言

図 2：小辞の文法化プロセス

Hack(2011) p. 69 をもとに筆者が作成。¹⁸

¹ 日本におけるレト・ロマンス語研究に際しては、その名称および用語の使い方についても揺れが生じる可能性がある。「ドロミテ・ラディン語」という呼称およびその定義をはじめ、本稿で用いている用語はどれも誤解が生じないことに主眼をおいた便宜上のものであり、いずれかの用語あるいは解釈の習慣的な使用を提案するものではない。また、必要に応じて地名・言語名の後にイタリア語による用語を付してあるが、これも指示対象をわかりやすくするための便宜上のものであることを断っておく。イタリア語を用いているのは、ドロミテ・ラディン語がイタリア国内で話されている言語であるために、関連する地名等には、少なくとも本稿で扱う範囲においてはイタリア語の形が存在し、その点において同じく現地で用いられている言語であるドイツ語やドロミテ・ラディン語そのものよりも有用であるためである。また、例文にはすべてグロスをイタリア語でつけているが、これは単にそれぞれの語の理解を容易にするためである。

² この定義を採用する理由は以下の三点である。第一に、これらの方言についてはドロミテ・ラディン語であるとする分類に異論が出ることはないと思われること。第二に、話者自身および外部から「ドロミテ・ラディンの共同体である」と認識されているコミュニティに属する人々が使う言語であること。第三に、本稿で扱う小辞が最も高い頻度で見られる方言群であることである。なお、Kramer(1977-1978)およびHack(2011)をはじめとする先行研究にならい、マレッバ方言 Marebbano はバディーア方言の一種であると見なすことにする。

³ ドロミテ・ラディン語はそれぞれの方言についても正書法が確立されているとは必ずしも言えず、また方言間での表記法の統一がなされているとも言えない言語であるが、本稿での表記は全て原典に従っている。

⁴ 以下、pa という形をドロミテ・ラディン語における疑問の小辞の代表形として扱う。

⁵ ただし、pa を含めたいくつかの形について、同著では一つの項にまとめて扱っているものの、その語源が同じであると断定はできないとしている。さらに、これらの語は疑問文にのみ現れるわけではなく、その他の文（特に命令文）にも現れる。本稿ではこの問題に立ち入らず、疑問文およびそこに現れる形 pa（あるいは po）についてのみ扱う。

⁶ ドロミテ・ラディン語を北イタリア諸方言の一種であると見なすかには議論があるが、ここでは Hack と同様、この立場をとることにする。また、グループの数について、同著では三つのグループとしているが、三つめのグループをさらに二つに分けているため、本稿では四つと見なすことにする。

7 付加が任意的で、かつ、付加しても意味が変化しないという用法の存在には、疑問が残る。ここでは紙面の都合上、グループ2に関しては今後の課題とし、Hack(2011)による記述を確認するのみにとどめる。

8 原文ママ。Ula は ola の間違いと思われる。

9 ここで言う「通常の」解釈とは、文脈なしに突然現れることのできる解釈である。

10 本来ならば個々のインフォーマントの属性にも配慮した記述が必要であろうが、Hack(2011)には報告されていない。

11 ただし、疑問詞を用いた疑問文ではバディーア方言同様に「通常の解釈のためには」義務的であるのに対し、そうでない疑問文では小辞がなければ疑問文として受け入れられない。この差に関しては本稿では扱わない。

12 テキストはそれぞれの方言の民話集を主に使用しつつ、必要に応じて、バディーア方言については賛美歌集およびドイツ語からの翻訳、さらに両方言について教科書を参照した。

13 Hackによれば pa の現れる「初期設定」位置は定動詞（または定動詞と人称代名詞前接形の連続）の直後であるため、(8)において mo が占めている位置は pa と同じ位置であると言って良いだろうと思われる。ただし、Hackによればここで言う初期設定位置とは pa がもっとも頻繁に現れる位置のことである。

14 a1 は非人称の形式的人称代名詞。

15 接続詞の mo について、Kramer(1988-1998)をはじめ、疑問文に現れる用法について言及している研究は見られなかった。また、疑問文に現れる mo についても、Valentin(2004)を除いて pa との関連性に関する記述は見られなかった。

16 -1 は非人称の形式的人称代名詞。

17 ドイツ語で書かれていた部分を筆者による日本語訳に差し替えて作成した。^^は岩塊を、その他の線は谷を表し、それぞれの谷に沿って話されている方言を表記してある。また、Xは主要な地点を表している。なお、同著ではアンペッツォ方言をドロミテ・ラディン語の一種と見なさない立場をとっているためここには載っていないが、リヴィナッロンゴ方言より東部で用いられている。

18 イタリア語およびドロミテ・ラディン語で書かれていた部分を筆者による日本語訳に差し替えて作成した。アルパーゴ方言は、ヴェネト州ベッルーノ県で話される方言である。段階1における各種の用法についても筆者による日本語訳を表記したが、その詳細については本稿では扱わない。

参考文献

- AA. VV. (1984), *Laldun l' signur*, San Martin de Tor : Ist. Ladin "Micurà de Rù"
- ANDERLAN-OBLETTER, Amalia (1991), *La rujeneda dla oma: gramatica dl ladin de Gherdëina*, Typak
- HACK, Franziska Maria (2011), *Variazione sintattica in Italia settentrionale: le interrogative con la particella po**, (オンライン)
http://asit.maldura.unipd.it/documenti/ql12/4_hack.pdf (参照 2015-04-23)
- KRAMER, Johannes (1977-1978), *Historische Grammatik des Dolomitenladinischen*, Lehmann
- KRAMER, Johannes (1988-1998), *Etymologisches Wörterbuch des Dolomitenladinischen*, Hamburg : Helmut Buske
- MEYER-LÜBKE, Wilhelm (1972), *Grammatik der romanischen Sprachen*, III, Hildesheim ; New York : Georg Olms, 556-560
- POLETTI, Cecilia (2000), *The Higher Functional Field*, Oxford University Press
- RENZI, Lorenzo & VANELLI, Laura (1982), *I pronomi soggetto in alcune varietà romanze*, Scritti in onore di G.B. Pellegrini, Pisa: Pacini, 120-145
- SILLER-RUNGGALDIER, Heidi (1993), *Caratteristiche della frase interrogativa a soggetto inverso nel Ladino Centrale*, *Actas do XIX Congreso Internacional de Lingüística e Filoloxía Románicas IV*, Ramón Lorenzo (ed.), 289-295
- TOLPEIT, Maria (1992), *Genofefa: teater te 7 pertes*, San Martin de Tor: Ist. Cultural Ladin Micurà de Rù
- VALENTIN, Daria (2004), *Curs de ladin Ōnesc leziuns por imparè le ladin dla Val Badia Undici lezioni per imparare il ladino della Val Badia*, San Martin de Tor: Ist. Ladin "Micurà de Rù"
- WOLFF, Karl Felix (1985), *L Reiam de Fanes y d' altra liejëndes*, Union di Ladins de Gherdëina
- ZINGERLE, Lydia (1985), *An cunta che ... : liëndes ladines*, Union di Ladins dla Val Badia